

RUBeC 演習を終えて

森 島 大 智

Daichi MORISHIMA

機械システム工学専攻修士課程 1年

1. はじめに

私は2015年8月15日～8月31日の約2週間、アメリカ合衆国カリフォルニア州の Jodo Shinshu Center にある Ryukoku University Berkeley Center にて開催された龍谷大学の短期留学プログラム「RUBeC 演習」参加しました。私は英語力の向上とアメリカの社会や生活・日本人との考え方の違いを学ぶことを目標として授業や現地企業と大学の訪問を行いました。

2. RUBeC 演習 I へ参加した目的

私が RUBeC 演習に参加したのは英会話力を向上させると共に、観光するだけでは見えてこないアメリカの実社会や文化を学びたいと考えたからです。グローバル化が進む現代においては、学問は国内で完結せずに海外とも積極的に協力していく必要があります。そのような状況において、私は国際会議に出席するため自らの研究を英語で説明できるようになることや、就職してからの海外赴任や出張に備えた予行練習の必要があると考え、そのためのカリキュラムとして本演習が優れていると思い参加しました。

3. 授業の内容

3.1 テクニカルライティング

水曜日を除いた平日の午前中はテクニカルライティングの授業を行いました。テクニカルライティングでは、事前に作成した自身の研究に関する英文要旨の校正を中心として、修正に必要な英文法の他により適切な文章に仕上げるための英語における曖昧な表現や単語の微妙なニュアンスの違いなども教えていただきました。例えば同じ未来を表現する意味

を持つ「will」と「be going to」についてどちらも「～しそうだ」という意味でしか捉えていなかったのですが、will は話し手の意思を表現する意味があり be going to には明らかにそうなりそうな未来を表す場合に使うというといった単語帳を見るだけでは理解しづらい部分を理解できました。また、現地の講師は工学を専攻している訳ではなかったので自分の研究内容について英語で噛み砕いて説明する必要があります。これは非常に難しいことでしたが英語で人に説明するための練習となりました。

3.2 プレゼンテーション

昼休憩を挟み午後からはプレゼンテーションの授業が行われ英会話において相手に伝えるのに重要な技術を学びました。例えばワードストレスは文章中の重要となる語句を強調して発音することで聞き手がすべての語句を聞き取れなくても強調された語句だけを聞くことで、全体的な内容を理解できるというものでした。またチャンキングは文章中の文節を意味のあるひとまとまりで区切って発音することで、聞く側の理解を促すというものでした。これらの技術は聞き手に単語を聞き取るための集中力を使わず、説明の内容に集中してもらえる手法でした。これらは「座学」として英語を勉強するだけでは分からないことであり、私の中で初めて「語学」として英語を勉強した経験でもありました。私の弱点は英文法だったのですが最終課題である自分の研究についてのプレゼンテーションでは授業で学んだことを最大限に活用することで、文法に間違いはあるが十分意味は伝わる発表であったと講師の先生に評価を頂くことができました。

4. 企業見学

一週目の水曜日にアメリカの計測機器メーカー最王手である Keysight Technologies 社に企業訪問させていただきました。同社の特徴は半導体・IC チップ・筐体に至るまで殆どの部品を自社開発・生産していることです。これにより徹底的な品質管理と知

的財産の流出を防止することが可能であるそうで、特に情報に対する意識の高さは工場内の随所に見られました。また社内の雰囲気も日本と異なっており、スポーツ設備や社内農園など社員が快適に過ごすための施設が整っていました。これはアメリカの雇用形態に起因するものであり、転職や解雇が多いアメリカにおいてはどの企業も優秀な社員を確保することに注力しているからだと思います。そのような環境では労働意欲が削がれてしまいそうなものですが、成果主義のアメリカにおいて給料は成果によって決まるので社員は業務と休憩のメリハリをつけて働くことができるそうです。これは時間当たりの生産性が低いと言われる日本が見習うべき点であると感じました。

5. 協定校訪問

2週目の水曜日はカリフォルニア大学デービス校 (University of California, Davis: 通称 UC Davis) に訪問しました。UC Davis は 10 あるカリフォルニア大学 (University of California) のキャンパスのうちの 1 つであり 22 km² という広大な土地を有しています。また “Greenest Schools” という賞を受賞する程多くの緑に囲まれた非常に美しい大学でした。同大学で印象深かったのはスタートアップルームの存在です。スタートアップルームとは学生がアイデアを形にすることを目的に作られたスペースで、ホワイトボードや 3D プリンターや NC 工作機・工具などが用意されており、学生が自らのアイデアをすぐ形にして試すことができるようになっています。UC Davis ではこのように学生によるアイデアを活かすことに力を入れており、他にも学生の起業を支援するための講義を開催し学生と企業の共同研究を推進するなどの取り組みをされていました。このように学生のアイデアを尊重しそこから何かを生

み出そうという試みは日本ではあまり聞かないのでとても新鮮に感じられました。またアメリカの大学生の学習意欲の高さには驚かされました。アメリカでは奨学金制度を利用する学生が多く学費は自分で払うのが当然であるという意識が強く、中には週 3 でバイト、週 3 で授業を受けている生徒もいるそうです。

また大学生は親元を離れて寮生活をするのが一般的であることから自立心も高いことも感じられました。こういった点は日本の学生も見習うべきであるように思います。

6. おわりに

本演習を通して英会話力を培うと共にアメリカの文化の一端に触れることができました。ネイティブスピーカーにしか分からないような微妙なニュアンスの違いなど、日本にいただけでは分からないことを学べたのは大きな成果であったと思います。また、現地企業や大学を訪問することでアメリカを見習うべき点や逆に日本が継続していくべき点を考えることができ、物事を見る視野を広げることができました。また私の中の最も大きな変化は英語に対する学習意欲が高まったことです。アメリカでの宿泊はホームステイで授業もすべて英語で行われるため否が応でも英語で会話する必要がありました。初めはなかなか伝わらず辛かったのですが、次第に相手に伝わるようになってそれが嬉しく感じられ、そこで初めて英語が「座学」ではなく「語学」であるということに気が付かされました。今年は戦後 70 周年です。歴史の大きな節目ともいえる年の 8 月 15 日にアメリカに渡航するという稀有な経験を通してアメリカと日本の未来について考えさせられました。